



2月

集落支援だより vol.49

「柱島群島」

鬼はそと
福はうち

柱島・黒島・端島



柱島群島に取材でお伺いするたびに、わたしは様々な島の自然や歴史・文化を知ることができました。そして全く知らなかったテーマにも出会いました。

〈集落調査を通じてみなさんからお聞きしたこと〉

- 海の産物と山の恵みである「寒ひじき」や「切り干し大根」が特産品であること
- 幕末期の第3代奇兵隊総管、赤禰武人（あかねたけと）と、東映時代劇映画で数多くの主演を務めた剣豪スター「大友柳太朗（おおともりゅうたろう）」が柱島出身であったこと
- 戦時中には柱島は日本海軍の艦艇停泊地となり、黒島住民によって海軍へ艦上戦闘機（ゼロ戦）が献納されたこと
- みなさんと直接会話することで「多彩な島の動向」や「興味深く面白い柱島の隠れたエピソード」を知ることができたこと

わたしは外部地域に居住されている島出身者やそのお孫さんたちには、こうした外の視点から見た柱島群島の歴史や魅力など、皆さんの故郷でもある柱島群島のルーツを、より誇りに思っていたきたいと思います。そして住民の皆さんには一人ひとりが手に手をとって、離島という地理的条件をプラスと考え、先祖代々から受け継いできた柱島群島の伝統や食文化・歴史を後世につなげていって欲しいと思っています。

柱島は海と風の香りを感じられる場所



全国には約 400 以上余りの有人島があり、その 4 割が瀬戸内海に位置しています。そして山口県には 21 の有人島が存在します。

近年、コロナの影響もあり、都市圏から離島への若い世代の移住者も増え、離島で働きながら生計を立て生活されている人たちの事例を多く耳にします。

離島での仕事は自然環境に合わせて組み合わせながら働いている人が多く、瀬戸内海のある離島では旅行者で賑わう夏と、強い風が吹き荒れて定期船が頻繁に欠航する冬とでは人や物の流れがガラリと変わるため、観光シーズン中だけ民宿や飲食店などで働きそれが終われば別の仕事をするといった、季節に合わせたワークスタイルが定着しているようです。一方、「定年後、島に戻りたいがもう住む家もないし、島には仕事もないから帰れない」といった島出身者もあり、住環境や雇用機会のミスマッチが発生しているのも事実のようです。

確かに都市部にはたくさんの職種があることは否めませんが、しかしひとつの仕事だけでほとんどの時間が埋まってしまう働き方が多く、逆に離島では季節に合わせて多彩な働き方にチャレンジでき、都会とは違ったライフスタイルが楽しめます。

また、離島には多くの山海資源や雇用機会がたくさん眠っていることをよく耳にします。こうした移住希望者たちが、自分たちの経験やスキル、島資源を活かしながら「やりたいこと」などを収入につなげ、島の皆さんと協働しながら喜んでもらえる働き方は非常にバランスが良く、「都市部にいなければやりたい仕事ができない」とは限らないといった先進事例も多くあります。

特に定年を迎えた島出身者の方にとっては、仕事のかけもちが日常的な離島での生活は、職場や職種にとらわれない柔軟な働き方や新たなライフスタイルの実現という意味で、島好きのわたしにとっては羨ましいようにも思えます。